

わなくてはならないのである。生物に死がなければ生もないのと同様に、アナキズムは敗北の自覚なしには再生はありえない。我々はすべ

ての過去のアナキズムへの批判の中から、再び、革命の刃を取り出さねばならないのだ。

特集・現代とアナキズム

プロレタリア独裁と連合主義

大沢正道

一九二六年九月六日、史上最初のアナキスト・インターナショナル大会といわれるサン・ティエ大会五〇周年を記念する集会在、スイスのベルンで開かれた。この集会には国際的に知られているアナキストたち、たとえばベルトニー、マラテスタ、ファブリらも参加したと伝えられるが、その討論の議題は次のとおりであった。

- 1、いかにして旧秩序を打倒し、破壊するか。
- 2、いかにして新権力の創造の結果として現われる革命の没落を防止するか。
- 3、いかにして経済生活の持続と再建を確保するか。

この集会での討議とその結論がどのようなものであったかについては、資料がないので分らない。わずかにマラテスタの「無政府主義組織論」がそれに関連するものと推定されるにとどまる。

しかし、G・P・マキシモフがその著「建設的アナキズム」で説く

「いわゆるプロレタリアートの独裁は革命的、人民の手中にある道具以外のなにものでもない。」「(傍点筆者)。シャピロはすぐ続いて、独裁は特微的に専制へと傾斜するゆえに、「したがってプロレタリアートの独裁は決して存在しえない」と断定するのだが、さらに反転して、こう述べている。

「……階級斗争の状況が労働者階級が先頭に立ち、他の諸階級がおくれるようになった時、他の諸階級はつねに彼らの所有を取り戻そうと務めるであろう。そこで責任を遂行するのはプロレタリアートの小部分となるであろう。しかしこれをなしうるのは党ではない、コミュニストでもアナキストでもない。党は知識、理論的基盤そしてまた偉大な理想をもつが、変革の精神をもたない。党はつねに必然的にドグマ的たらしざるをえない。」(傍点筆等)

「プロレタリアートの小部分」は、これを「プロレタリアートの前衛」と言い直してもよいだろう。シャピロのこの認識が革命の過程において提起されたものであることを忘れてはならない。シャピロの発言をもう少し聞こう。

「4、社会革命は経済革命である。資本主義の絶滅および労働者による全産業と経済生活の管理である。敵階級は国家の形体には少しも留意しない。それが留意するのは資本主義であり、経済制度であり、諸工場々々である。この立場から社会革命の最も自然で最も適したくない手は、革命的な労働者組織、組合である。これらの参加なしに社会革命は成功しない。」

5、この立場でせいぜい言うことはプロレタリアート内の革命的労働者組織の独裁である。革命的諸政党が革命的プロレタリアート

一九一八年にクロボトキンが新聞「パンと自由」のなかで、「われわれはわれわれが考えたように豊かでない」という事実が、アナキズムを「補足的な思想」の分野へと入らせたといひ、問題はもはや「破壊しながら創造するであろう」ではなく、「創造しながら破壊するであろう」にある、と述べている。

おなじ年の八月二五日、アナルコサンジカリストたちは革命後最初の大会を開催した。全ロシアアナルコサンジカリスト連合大会がそれである。この大会で採択された六カ条の決議が、革命中のロシアのアナルコサンジカリストの立場をもっともよく示しているといわれるがこの決議へのA・シャピロの補足説明には、きわめて重要な問題が示唆されている。A・シャピロはモスクワのもっとも著名なアナルコサンジカリストの一人である。彼は十カ条のこの説明のなかで、プロレタリアートの独裁に注目している。

大衆のなかに深く押し込まれれば押し込まれるほど、過渡期はそれだけ短くなるであろう。

6、最初に問題になるのはプロレタリアートの独裁ではなくて、革命の社会的成果を保持するためにプロレタリアートによって創りだされた団体の建設である。プロレタリアートへの一党独裁は魂の抜けたメカニズムを導入する。なぜなら党は規律の原則を認めるが、真の生活の戦術を認めないからである。

7、ドグマ的な、機械的な党独裁はドグマ的な、機械的な集権主義を導入する。党はこれ以外の方法で一団の経済生活を管理することができない。ドグマ的な、機械的な集権主義はあらゆる発意を殺し、それが築き上げる以上に打ち壊す。その特徴は破壊であり、建設ではない。」

ここで提起されている問題は「一党独裁の否定」と「革命的労働者組織、組合の独裁の消極的な肯定」である。ロシア革命当時、労働者独裁の思想がおもにアナルコサンジカリストの間に擡頭してきたことは、ナバト連盟はウクライナにおけるアナキスト団体で、マフノ運動に密接に関連しているが、ナバト連盟自身はマフノ運動を革命的だがアナキストの運動ではないと宣言している。ここに引用する決議は一九二〇年九月初めハルコフで開催された同連盟最後の会議で採択されたものだ。

決議は、アナキズム理論の基本原則はロシア革命の過程においてその正しさを確認したとする立場から、「過渡期」という用語をその事実は承認しながら、すでにマルクス主義の公用語になっているという理由で否定し、マルクス主義に影響されているという理由でサンジカリズムに反対し、続いて次のように述べている。

「4、われわれはまた、若干の同志がそれを受け容れるようわれわれに忠告している努力にもかかわらず、「労働者の独裁」という表現の使用を拒否する。この「労働者の独裁」はいまやその破産が明らかになった常套語「プロレタリアートの独裁」を拡大した以外のなものでもない。それはついに不可避免的にプロレタリアートの一部の、党の、官僚の、そして若干の指導者の大衆に対する独裁を導くにちがいない。アナキーはどのような独裁とも調和させることはできない。他の人々への階級意識のある労働者の独裁さえ、よしんばそれが他の人々のためであっても、社会革命を深める時期をアナキストの経験の結果と称してもよいし、あるいはこの時期に労働者の利益が寄食者の利益以上に高められるだろうという立場から、もしひとがそう望むなら、労働者の独裁と称してもよいかもしれない。……」

ナバト連盟のこの決議は、用語の内容より形式を問題にしている点で形式主義的であり、ナバト連盟が「労働者の独裁」そのものに反対しているのか、その用語に反対しているのか、明確でない。しかし、いわば最も原則的なアナキズムの立場を堅持するかにみえるナバト連盟でさえ、次のように告発せざるをえなかったのである。

「2、アナキストの意味での革命の第一日と、アナキズムあるいはアナキストコミュニティの終局の目的との間に、古い隷従の残りかすが次第に消えてゆき、新しい社会の新しい形態が暗中模索しながら生命をなんとか擱み取ってゆく期間のあることを、アナキストは決して否定しない。欠点と誤まりと完成へ向うたゆまざる努力にみちたこの期間は、いろいろに名づけることができる。支配なしの生活経験の結果、社会革命を深める時期、アナキストコミュニティへの第一歩。それはまた、不完全な社会生活の形態から完全な形態へ導く特徴的な姿を

とらえて過渡期と呼んでもよいかもしれない。」

ナバト連盟が過渡期という名称を拒否することはすでに述べたとおりだが、問題の要点はそのような期間の存在の必然を認めることであり、その認識の上立って、この期間におけるアナキズムあるいはアナルコサンジカリズムの斗争形態、戦略戦術を追求することにある。

G・P・マキシモフが指摘した問題の所在はまさにこのようなものであり、ロシアのアナキストたちによって最初に提起され、一九二〇年代に国際アナキズム運動の理論課題となったのは、この過渡期をめぐる諸問題であったのだ。

補足的にいうなら、マルクス主義もまたロシア革命を契機としてこの問題に遭遇しており、レーニン主義、すなわちプロレタリアート独裁論の確立という形で一応の解決を遂げている。もちろん、プロレタリアート独裁の問題をめぐって、カウツキーのような正統派マルクス主義者やローザ・ルクセンブルグのような革命的マルクス主義者その他の反対、批判が行われているが、マルクス主義における過渡期問題の解決はプロレタリアートの独裁（厳密にいうならプロレタリアートの前衛党である共産党独裁）として提出されていると言って差支えあるまい。

それではアナキズムの陣営はどうか。たとえばマラテスタの「無政府論」をみてみよう。彼は次のように言っている。

「アナキストは新しい方法を示す。万人の自由発意と自由合意である。こうして私的所有の革命的廃止以後、各人は社会的富を処理する平等な権力をもつであろう。この方法は私的所有の再建を認めず、自由連合の手段によって連帯の原理の完全な勝利へ導くにちがいない。」これはロシア革命以前のアナキズム理論の反覆以上を出ていない。

こゝにはロシアのアナキストたちがぶつかった壁の重みが意識されていないようだ。わずかに結びの教語のうちに、それが否定的に感じられるにすぎない。

「たしかにいろいろな困難も不便もあるだろう。しかし、人民は、びくともしないだろう。彼らのみがあらゆる困難をアナキスチックに、すなわち利害を有するものの直接行動と自由合意によって解決することができる。

次の革命的試みのうちに勝利するのがアナキーと社会主義であるかどうか、われわれは断言できない。しかしこれはたしかだ。すなわち、かりにいわずに過渡期綱領のどれかが勝利したとしても、それはわれわれが一時的に敗れたからであり、人類がその下にあえていっている悪の制度の一部分でも残した方が賢明だと考えたからでは決していない。(傍点筆者)

ここではジャビロが指摘したような、階級斗争の最高潮に達した革命期における被支配、被搾取階級内の進んだ層と遅れた層の問題、都市労働者、農民、技術者、知識人等々の足並みの不均衡などは、「万人」という抽象的な表現のうちに覆われてしまい、人民への美化された信頼が実際の分析を阻んでいる。人民のみが革命の諸困難を克服することができるとするマラテスタの発言は、イタリアの生んだ大革命家のことばとして千鈞の重みをもっている。しかし、それは人民の一面をついたものであって、資本主義国家制度に馴致され、賃金奴隷化され、忠誠なる国民化された人民の他の一面を捨棄している。革命はたんにブルジョアを打倒し、資本主義体制を絶滅させるだけでなく、資本主義的残りかすを拭い去り、ブルジョアの国民から革命的人民へとプロレタリアート大衆自身が自己脱皮を遂げる過程でもあ

る。過渡期とは、この過程の必然の産物でもあるのだ。人民のうちの反人民的側面を捨象するマラテスタにとって、過渡期が問題として意識されないのは、そのためである。

マラテスタをアナキズム陣営におけるカウツキー的存在だとすれば過渡期問題を革命の渦中においていちゃけく提起したマキシモフは、問題意識の高さにおいてレーニンのであったと比較できよう。マキシモフの解答はその著「建設的アナキズム」で展開されている。

しかし、彼の解答は形態論的であって、革命のダイナミクスにおけるアナルコサンジカリストの実践の理論、すなわち組織論が欠けている。政治、経済の全分野にわたって、過渡期においてあるべき形態がかなり詳細に記述されているのだが、それが平面的な青写真以上を出ず、活動する組織方針へと接続しないのは、過渡期における権力の問題が不在になっているからである。

ほくはこの論文を書くにあたって、プロレタリアートの独裁に関するアナキズム関係の文献をあさってみたが、そのほとんどがマラテスタ的な、正統的、原則的、抽象的批判に終始し、レーニン主義に対置すべき現実的理論を見いだすことがついにできなかった。ナバト連盟の批判が早くも示しているように、プロレタリアートの独裁が「プロレタリアートの一部の、党の、官僚の、そして若干の指導者の大衆に対する独裁」に転化するとは、論理的にも歴史的にも証明されている。けれども、それだけでは問題の前半が処理されたにとどまる。レーニン主義がスターリン主義へと発展し、ロシア革命を破産に導いた歴史的な事実（厳密にいえばこの事実さえこんにちなお有力な否定者をもっているのだが）、からプロレタリアートの独裁を否定するからには、それに代わる組織論が提起されなくてはならない。万人の自由

発意、自由合意、自由連合、直接行動はスローガンとしては有用だが理論ではない。これらのスローガンを組み込む組織論が展開されなくては、問題の後半は尻抜けとなってしまう。

ロシア革命の破産を承認した少数の革命的マルクス主義者たちは、レーニン主義からスターリン主義への発展を必然的なものとすることを拒み、レーニン主義を起点とする別の方向への発展の可能性を探究している。トロツキズムはこの主張を裏づけるものといえよう。この視点においては、プロレタリアートの独裁が必然に、党の、官僚の、ついにはスターリン個人の独裁に転化するという論理は拒否され、それはたんに一つの可能性であり、違った転化の論理も可能だと主張することができるし、現に「真の前衛党」の確立を主張している今日の革命的マルクス主義者、あるいはトロツキストたちは、別の可能性をふくむものとしてプロレタリアートの独裁をいぜんとして提唱しているのである。もっとも今日までのところ、党の、官僚の、ついには個人の独裁に転化しないプロレタリアートの独裁について、彼らが十分に問題を意識しているか、どうかは疑問である。すくなくともこの問題に関する理論的發展はみられない。

そのかぎりでは、ナバト連盟的批判はなお執拗に彼らに対してぶつけられなくてはならない。しかし、真に彼らと対決し、彼らを克服するためには、歴史的な事実によりかかった批判だけでは不十分だ。歴史的な事実を基盤とし、抽象的原则をつらぬきつつ、それをたかめてゆく、過渡期における革命の組織論が展開されなくては、革命のアナキズムの勝利、われわれの確信するところでは真の人間解放は、とうてい達成せられないであろう。

なぜこれまで、アナキストもしくはアナルコサンジカリストは、過

渡期における革命の組織論を十分に展開しえなかったか。マラテスタ的な万人の自由発意、自由合意、自由連合、直接行動のスローガンの域を脱しえなかったか。

ほくはそのおもな理由を、アナキストもしくはアナルコサンジカリストの権力論に求めたい。権力は彼らにとっていわば一種のタブーであり、その理論的分析の観念論的な誤まりが、権力一般の否定へと彼らを導き、彼らの未来への展望を静態的な、平面的な構図へと縛りつけたのだ。「仏作って魂入れず」とはこのことだ。これらの構図がダイナミックな活動体となるためには、そこに力を注入しなくてはならない。人民の個々の物理的な、心理的な力を集団化し、組織化したものを権力と呼ぶなら、この権力を革命的過渡期においてどのように集団化し、組織化するかがわれわれの問題なのであって、作りあげられた青写真のままに青写真にすぎないのである。

誤解を避けるためにだいぶ廻り道をしてきたが、この辺で結論に入ろう。ほくがロシア革命の渦中であって苦斗していたアナルコサンジカリストやアナキストたちの発言を高く評価するのは、たんにそれらが革命の現場からの声というだけの理由ではなく、ナバト連盟でさえ過渡期における権力の問題を、たんなる権力否定として扱いきれないものとして意識しているからである。

このような問題意識をもって過渡期を考察する場合、クロボトキンが革命のシンボルとさえみなした収用、すなわち人民によるブルジョアジー、地主の私的所有の実力による占拠、そしてこれらブルジョアジー、地主層の旧特権の恢復をめざす反革命への、これまた実力による抑圧と教育、これらの実践がブルジョアジーとプロレタリアートの自由発意や自由合意によってなされるものでないことはあきらかである。

集権主義（それはマルクス、エンゲルスにつながっている）に無批判なのは不可解である。

プロレタリアート独裁の政治形態である中央集権主義に對置するものとして、われわれは連合主義（対照的に分権主義といってもよからう）を掲げることができる。ここには三つの重大な問題がある。第一は政治におけるビュロクラシー——国家の問題、第二は経済におけるビュロクラシー——産業の問題、第三は精神におけるビュロクラシー——権威主義の問題である。

一九六一年の今日は、一九一七年のロシア革命の時点と、政治においても、経済においても、精神においても、いちじるしく相異している。その相異を最も特徴づけるものがあらゆる形態におけるビュロクラシーにはかならない。今日の革命はたんに所有形態の変革のみでなく、組織形態の変革をも目ざすものでなくてはならない。

トロツキーの次の批評はスターリン主義の法的擬制をついたものとして有名だが、それは今日の革命論のかなめをもついていると解しうるであろう。

「もしある船が集団的所有と宣言され、しかし依然として船客は一等、二等、三等に分れているとしたら、三等船客にとっては生活状態における格差が所有権における法律の変革より比較にならぬ重要性をもってくることは明白である。それに反して一等船客は、コーヒールと葉巻をくわえながら、集団的所有がすべてであり、安楽な船室は無にひとしいという思想を提議するであろう。」

すなわち、プロレタリアートをはじめとする被抑圧、被搾取人民の革命において成すべき課題は、ブルジョアジー、地主の私的所有的すべてを収用し、社会化すると同時に、ブルジョアジーの独裁下にあっ

る。それはプロレタリアートの実力によるブルジョアジーへの一方的な強制である。この前提なしに革命を論ずることは、なにも論じないにひとしい。そしてその意味において、プロレタリアートのブルジョアジーへの独裁はアナキズムにあっても是認しうるものである。プロレタリアートの独裁のこのような拡張解釈については、多くの異議が予想される。だが、ブルジョアジーの独裁に対するものとしてプロレタリアートの独裁を想定した時のマルクスのイメージはこのような社会的独裁であったようだ。また、バクーニンの破壊、クロボトキンの収用も、理論的にはプロレタリアートのブルジョアジーに対する社会的独裁とみなすことができる。

このような意味におけるブルジョアジーの独裁が、政治的には立憲君主制から民主共和制、ファシズム独裁制にいたるいくつもの形態と過程をとるように、プロレタリアートの独裁もまた、いくつもの形態と過程をとらうであろう。厳格な中央集権主義を採用したレーニン主義はその一つの形態であり、アナキストの信条とする自由発意、自由合意、自由連合を基礎とする連合主義はいま一つの形態である。

言いかえればブルジョアジーに対するプロレタリアートの独裁を完全に、徹底的に実践するために、レーニンはプロレタリアート自身の権力を徹底的に中央集権的に集団化し、組織化しようとした。彼は自発的なプロレタリアートの権力の組織体であったソヴェトに注目し、「すべての権力をソヴェトへ」のスローガンに同意した。だが、彼にとってソヴェトへ集中されたすべての権力は、さらに集中化して党に集中され、ついには彼自身に集中されなくてはならなかった。彼は電報一本で武器を隠す農民を銃殺する権力をもつ独裁者であった。この点からすれば、いわゆる反スターリン主義者がレーニンの極度の中央

て彼らを抑圧し、搾取していたいっさいのビュクラシーを破壊し、粉碎する過程においてプロレタリアートの独裁を確立し、強力にし、その党あるいは官僚あるいは個人の独裁への転化を防止し、支配と搾取のない共産主義社会への道を開拓することである。

ビュクラシーとはなにか。要約していうならば権力の中央集権制である。人民のうちに起源をもつ権力を中央へ少数者へ集中し、独占する結果として、集中され、独占された巨大な権力は少数者の意のままとなって機能する道具を必要とする。官僚とはこの道具にほかならず、官僚がつねに反人民的であるのはそのためである。権力の中央集権制なくしてビュクラシーは存立しえない。

今日の革命は、ブルジョア的な、形式的な意味でなく、プロレタリア的な、実質的な意味において、ブルジョアジーに集中され、独占された政治的、経済的、精神的権力のプロレタリアートへの完全な奪還を要求している。プロレタリアートの独裁とはプロレタリアートをはじめとする被抑圧、被搾取人民が本来彼らのものである権力を彼ら自身に取り戻す過程にほかならない。彼らがひとりひとり真の主権者になった時、その時共産主義社会の時代が始まるであろう。

このような観点に立つ時、われわれは国家権力の即時廃止というバクニン以来のアナキズムの綱領に、いささかの修正を加わえる必要も認めない。今日なお、最も左翼的な革命的なマルクス主義者さえ、国家権力の獲得をスローガンに掲げている。彼らは国家権力を獲得し世界的に有能と定評のある龐大な日本の官僚を温存して上からの革命を遂行するつもりらしいが、このような政治形態をとるプロレタリアート独裁は、かならず党の、官僚の、個人の独裁へと転化し、革命を破産へ導くであろう。

われわれはあくまで議会主義を否定し、本質的にブルジョアジー独裁の政治機関である議会への参加、選挙斗争を拒否しなくてはならない。われわれにとって国家権力は即時廃止すべきものであって、決して利用してはならないものだからである。

レーニン「国家と革命」において、中央集権主義に固執しつつ、過渡期における「多数者である被搾取者による少数者である搾取者の抑圧」の必要を説き、「抑圧のための特殊な機関、特殊な機構である『国家』は、まだ必要であるが、しかしこれはすでに過渡的な国家であり、すでに本来の意味の国家ではない」と述べている。

レーニンはまた、プロレタリアートによるブルジョアジーの抑圧を主として数量の比較からブルジョアジーによるプロレタリアートの抑圧より「比較的容易で、簡単で、自然なこと」と見、「非常に簡単な『機構』によっても、それどころか、ほとんど『機構』がなくても、特殊な機関がなくても、武装した大衆のたんなる組織（さきばしりし）を言えば、労働者・兵士代表ソヴェトのような）によっても、搾取者を抑圧することができる。」と書いている。

ソヴェトが「たんなる組織」だというレーニンの認識は、彼が人民のなから自然発生的に、彼ら自身の権力の結合体として創造されたソヴェトの本質をほとんど理解していないことを物語るが、その点を不問に付すれば、ソヴェトによってブルジョアジーを抑圧しようというレーニンの見解に同意することはできよう。

この短い一節でのレーニンの論理は混乱している。彼は前半では、「過渡期な国家はまだ必要だ」といい、後半では「国家——機構がなくても、ソヴェトのようなものでもブルジョアジーの抑圧は可能だと述べる。もしソヴェトによる抑圧が可能だとすれば、「過渡期な国家」す

ら不用になるであろう。なぜならソヴェトはすでに述べたように、国家に対立する人民の権力の新しい結合体であり、これまで国家に収奪され、集中され、独占されていた人民の権力を奪い返し、分解し、適合する組織だからである。

プロレタリアートの独裁における連合主義の政治過程と政治形態は従って次のようになる。すなわち、われわれは、国家権力に對置するものとして、真に人民の権力を結合するソヴェト権力を提起する。われわれのスローガンは「国家権力の獲得」ではなくて、「すべての権力をソヴェトへ」であり、「国家の廃止、ソヴェト連合の確立」である。政治斗争におけるわれわれの主たる任務は、議会に政治代表を送る選挙斗争ではなくて、人民自身の権力を結合し、代表するソヴェト（あるいはコンミュン）確立の斗争でなければならない。

次にわれわれは経済の分野における革命の問題を考察しなければならない。すでに述べたように、今日の革命は所有形態の変革のみでなく、組織形態の変革をも要求している。従ってこの分野の問題点は二つある。一つはブルジョアの私的所有からどのような所有形態に変革するか、という問題、二つはブルジョアの企業組織からどのような産業組織に変革するか、という問題である。

第一の問題について、ここでもわれわれはまたマルクス主義者と対立する。彼らの掲げるスローガンはなにか。国有化、国営である。ふたたび「国家と革命」から引用するなら、過渡期において、「すべての市民は武装した労働者である国家にやとわれる勤務員に転化する。すべてのが、一つの全人民的な国家的「シンジケート」の勤務員と労働者になる」とレーニンは書いている。

「過渡的な」な「本来の意味の国家でない」国家は、その国のすべ

での生産と分配の手段の所有者となり、その国のすべての人民の雇主となる巨大な経済的権力を掌握する。このような巨大な経済的権力はどのような大ブルジョアジーによっても、もたれたことはないであろう。それは法的には全人民（あるいは国民）の所有であるかもしれないが、実的には国家権力の掌握者、すなわち党、官僚の所有にほかならない。その結果はどうか。経済的権力と国家権力は相互に強化され、ついに新しい階級層分裂を導くに至る。すなわち革命はここでもまた破産するのだ。

「国家の即時廃止」を主張するわれわれは当然、「国有化、国営」に反対する。われわれのスローガンは社会化、労働者管理である。労働者、農民は生産点において、ブルジョアジー、地主と対決し、実力によって工場、事業場、土地等すべての生産手段を収用する。シャピロが指摘したように、生産関係の変革こそ社会革命の最重要点でありそれにはこの収用が完全に徹底的に、クロボトキンが強調する如く、一物も残さずになされなければならない。この任務にもっとも適当なのは革命政府の役人でも党の官僚でもない。生産点で働く労働者、農民の組織、すなわちサンジカである。

すべての人民が国家のやとわれ員になるのではない。すべての人民が各産業にに応じて労働者の機関としてすでに機能しているサンジカに所属し、すべての生産手段はサンジカによって社会化され、サンジカを通じて労働者により管理される。

レーニンが心配していた文言や「計算と統制」の仕事の未熟練は、今日の日本の労働者にはほとんどみられない。彼らは技術者の協力を得て、十分今日の高度で複雑な産業を管理し、経営してゆく能力を所有している。のみならず、もしすべての産業が社会化され、労働者管

理に移されたならば、労働者の創意と工夫は、今日、彼らを合理化の名の下に抑圧している企業におけるビュロクラシーを打破するであろう。

ここに第二の問題、すなわち組織形態の変革の問題が提起される。そこには多くの問題が見いだされる。産業の地域的分散、産業のサンジカによる整備に基づく二重構造の解消、賃金の平等化、サンジカ全国連合による生産、分配計画等々、これらの諸問題の解決は賃金制度の廃止、農業および工業の一体化、労働と閑暇の一体化という共産主義社会への前提条件を成すものである。

われわれが今日執拗に生産点における直接行動を労働者に呼びかけるのは、それが労働者が直接ブルジョアと対峙し、斗争する過程において、その斗争力を蓄積し、革命においてたんに表層部だけでなく、社会の底辺からこれをつくがえし、彼ら自身がその経済的権力をサンジカを通じて確立することのできる唯一の道だからである。

なお、これに関連して論ずべき問題、たとえば権威主義の問題など多々ある。しかし所定の紙数もかなり越え、もはや許された時間もつきた。後日、さらにこれらとすべてについて詳論することを約して終りたい。

### 詩誌 イオム

アナキズムをかゝる唯一の……詩人集団

64集 近刊……イオム同盟

### 読後感想を募る!!

無政府研究からアナキズムへと誌名改題とともに、まだ不十分なながら編集内容も一新したと自負しています。

本号特集「現代とアナキズム」について、みなさんから御意見を募り、紙上に掲載したり今後の編集に反映してゆきたいと思ひます。

主要論文の一、二について、又は全般的な印象について読後の感想、批評をお送り下さい。

切 六月十五日(採否一任のこと)

字数 六〇〇字——一五〇〇字まで

送り先 東京都新宿区北山伏町33 大沢方

アナキズム編集委員会

☆お送り下さった方には次号(七月発行)を贈呈申し上げます。

### 特集・現代とアナキズム

## 幸徳の「直接行動論」の今日的意味

秋 山

「この時代の議会政策と直接行動の論争を、戦術論争という人もいるが、そんな馬鹿なことはない。田添の理論はいちおう筋は通っている。しかし幸徳の直接行動論にいたってはナンセンスである。労働組合の組織運動などやらす、また組合もないのにどうしてゼネラル、ストライキをやるのか。だからこのときの論争は、戦術論争などといった、まともなものではないのである。」(「近代日本の良心」—片山・幸徳・堺。山辺健太郎)

「直接行動論を今日の目で批判するのはやさしい。——そういう言葉が彼は革命的貴族、革命的武士ともよぶべき人物で、庶民的感觉とは縁遠い。改良主義者と罵られながら、黙々と労働者のなかへいり、地道な労働運動をつづける片山とは対照的な人物だ。もっとも熱心に労働者の直接行動を唱えた秋水が、現実には労働者と結びつき得なかったことは悲劇である。」(「幸徳秋水」—青地農)

ここにあげた卑近な二つの例に示されたような理解が幸徳秋水の直接行動論については、最近まで常識化されていた。それにはいくつかの理論もかんがえられるが、ひどいものになると直接行動論をテロリズム又は破壊主義と同義に解している場合さえあった。直接行動論に

清

する事大主義から、五十年前の論争を割り切ろうとする気の毒な眼実追随主義のなかに、わが国の社会運動史並に労働運動史の理解を妨げているものがあるのである。こともなげに「直接行動論を今日の眼で批判するのはやさしい」などといわせるものにそのあらわれのひどさがある。

無造作にそういつてのけられるほどに、直接行動論が批判しやすい過去の誤った主張であったようにその目にうつるのは、論者の、歴史的事実に対する無定見を示すものだが、おそらく彼らには(この二つの例の外にも)それがほとんど疑われていないのだから、そのいい加減さがわかるとういうものだ。たとえば、幸徳の直接行動論の指示に啓発されて起った大正のアナルコ・サンジカリズムの活発な組織とたたかいをわが国の労働運動史の上にどう価値づけるか、どう理論づけるか、すぐにも困難な問題がおこるはずだ。ところが前の誤謬を誤謬と認めないためには、アナルコ・サンジカリズムの運動にもまた目を蔽うしかなく、現に多くの、社会運動史はそのため大正の労働運動を極めて偏破にしかとらえ得ず、日本の労働運動を實質よりも低く狭く

評価せざるを得ない現状であり、その偏破を正當づけるためには官僚